

平成25年度成果報告書

I. 業務の内容

1. 業務の題目

「科学技術をめぐる参加型の議論の場を不断に創出するシステムの開発」

2. 担当フェロー

三上 直之
八木 絵香

3. 当該年度における成果

前年度の「生物多様性に関する世界市民会議（World Wide Views）」（日本科学未来館主催）を対象とした事例研究を踏まえて、同事例の参与観察によって得たデータセットの解析を進め、その成果を発表した。同時に、対話の場のネットワーク展開に向けたプラットフォームの確立と、手法のパッケージ化、ウェブサイト構築等を進めた。議論の場の国際的な展開可能性についても、引き続き検討した。

①参加者による議論過程の分析と対話の意義の解明

a. 議論過程の分析とその成果の発表

- ・平成24年度に実施した世界市民会議（World Wide Views）を対象とした参与観察では、一般から募った市民参加者約100人が17グループに分かれて討論した内容を全て録音し、そのうち10グループ分を書き起し、質的分析が可能なデータセットとして整備している。今年度は、昨年度に引き続き、このデータセットを用いた分析を行った。（1）討論前後でのテーマについての関心の変化と、それに影響を及ぼす要因、（2）参加者による情報資料の参照の実態と適切な情報提供のあり方、（3）グループ討論におけるファシリテーターの役割、（4）グローバルな課題に対する参加者の関心と、討論を通じたその深化の様相などの観点を中心に、討論データの質的分析を進めた。
- ・その結果、参加者が、自分たちの日常生活とは隔たりのある地球規模課題について議論するため、体験や実感の持ち込みや、情報資料に対する多様な解釈の開陳、鍵となる概念をめぐる議論などを通じて、議題を自らの生活に引きつける「文脈づくり」を行っていることが明らかになった。この知見を踏まえると、世界市民会議のような手法を用いて、世界共通の議題のもとでの市民参加による議論を実施する場合、世界共通の情報資料は必要だとしても、それを補うローカル版の補足資料も用意し、参加者の文脈づくりを支援する必要があることが示唆される。会議進行のあり方についても、「正しい」情報の参照によって情報資料への疑問や異論が生じない状態を理想とするのではなく、誤解も含めた多様な意見が、異なる経験を持つ他の参加者の意見により応酬され、そうしたやりとりが各参加者の認識の深まりにつながるようなファシリテーションが目指されるべきだと言える（※1、※2）。

b. 発展的・総合的なデータ解析

- ・上記の議論過程分析を踏まえ、平成24年度の世界市民会議参加者へのアンケート調査の結果も併用しつつ、議論の場に参加する人々の動機づけの分析と、参加障壁の緩和のための方策の検討を行った。

②対話の場のネットワーク展開のための手法開発

a. ネットワーク展開ためのプラットフォーム確立

- ・今年度は、ネットワーク展開のためのモデルケースを確立することを目的に、静岡科学館る・く・ると連携して活動を展開した。具体的には、静岡科学館主催の科学コミュニケーター育

成講座（JST「ネットワーク形成先進的・科学館連携型」）において、平成24年度に開発した科学館等向けの対話プログラム（2時間）を展開した。その上で、次年度以降の「科学コミュニケーション育成講座」のコアプログラムとして本プログラムを挿入し、地域の中にさまざまなネットワークを有する受講者（教員・サイエンスボランティア等）が講座の一環として、社会教育施設や学校等の現場と協働して対話イベントを実施し、科学技術をめぐる対話の場を社会の中にネットワーク的に展開するモデルを確立した。また本年度においても既に、静岡科学館のスタッフが主体となり、本プログラムを利用した研修や対話イベントも実施されており、来年度以降の本格展開に先駆けて、ネットワーク展開が進みつつある。

- ・その他にも、静岡科学館が主催した「サイエンスピクニック2014」（平成26年3月8日～9日）において、本プログラムをSSH指定校の中高生や日本サイエンスコミュニケーション協会の若手に向けて展開し、今後の連携の可能性について検討した。
- b. 手法のパッケージ化とウェブサイトの構築
 - ・平成24年度にプロトタイプを開発したプログラム（※3）について外部デザイナーと共にパッケージ化を図った。またパッケージデザインとあわせて、結果の共有と手法展開のためのウェブサイト「さんかく△テーブル」を構築した。「さんかく△テーブル」というネーミングには、「①○（完全な正解）や×（完全な不正解）がある問いではなく、そのあいだにある△（○でもない×でもない第三の答え方）を探し出すプログラムであること」「②市民の参画（さんかく）が必要であること」「③プログラム中で三度書く（さんかく）というプロセスを含むこと」という意味が込められている。
- c. 新規パッケージの開発
 - ・生物多様性以外の重要テーマでも同様の対話プログラムを実施できるよう、新規パッケージを開発した。具体的には、再生医療技術に係る話題の中でも特に「ヒトの要素をもつ動物（ACHM: Animals containing Human Materials）を用いた研究を進めること」をテーマに手法開発を実施し、平成25年12月12日に大阪府立豊中高等学校で試行した。

③国際的な展開可能性に関する検討

- a. 共同研究への参画と国際的な展開可能性の検討
 - ・過去2回の世界市民会議や、これまでの国内での参加型の議論の場づくりの経験を踏まえ、こうした知見の国際的な活用・展開の可能性を検討するため、平成24年の世界市民会議を主な対象に多国間での参加型の議論の場の可能性と課題を解明する国際共同研究（米国、フィンランドの研究者を中心に約25名で構成）に引き続き参画し、活動した。
 - ・この国際共同研究の一環として、平成26年度に刊行予定の単行本（Governing Biodiversity through Democratic Deliberationと題して、Routledgeから出版予定）の1章分として、論文を執筆した。原稿は編者と外部査読者2名の審査を受け、それを踏まえたユニット内部での議論も経て、平成26年2月に改訂稿を提出した。この論文の中では、平成24年の世界市民会議の実施経験、参与観察の分析に基づき、グローバルな議論の枠組みと、ローカルな文化や生活との間のギャップ（global-local gaps）の存在と、それを橋渡しするのに有効と思われる会議設計上の工夫や改善点について論じた。
 - ・なお、この共同研究の一環として開かれた国際ワークショップ（平成25年5月、ヘルシンキ）に出席し、他国の共同研究参加者とともに、単行本全体の構成や、各章の草稿の内容について検討した。
- b. 世界市民会議等の準備状況に関する情報収集
 - ・世界市民会議など、次の多国間の参加型会議の開催に向けた国際的なネットワークの活動状況を把握するため、上記国際ワークショップなどの機会も活用して情報収集した。当初、平成26年に韓国で行われる生物多様性条約の締約国会議に合わせて、3度目の世界市民会議の開催を模索する動きがあったが、資金面などで準備が整わず、見送られることになった。

【主な成果発表】

- ※1 郡伸子・寺村たから・佐尾賢太郎・遠藤恭平・三上直之「地球規模での「科学技術への市民参加」はいかにして可能か? : 生物多様性に関する WWViews の討論過程の参与観察から」『科学技術コミュニケーション』13: 31-46, 2013 年.
- ※2 池辺靖・黒川紘美・寺村たから・佐尾賢太郎「国際的政策決定プロセスへの市民コンサルテーションの枠組みづくりについて: 「世界市民会議 World Wide Views~生物多様性を考える」の実施」『科学技術コミュニケーション』13: 98-110, 2013 年.
- ※3 八木絵香・山内保典「論争的な科学技術の問題に関する「気軽な」対話の場づくりに向けて: 「生物多様性」をテーマとしたプログラムの開発を例に」『科学技術コミュニケーション』13: 72-86, 2013 年.

【研究会の開催】(カッコ内は報告・話題提供者)

- ・第1回 2013年7月8日 13:00~17:00 日本科学未来館
 - i) 生物多様性に関する WWViews についての分析 (寺村たから・佐尾賢太郎・黒川紘美・池辺靖)
 - ii) 参加型テクノロジーアセスメントに関する参加障壁の研究 (山内保典)
 - iii) How to Bridge the Gaps between Global and Local Perspectives in Citizen Deliberation? The Case of WWViews in Japan (三上直之・八木絵香)
- ・第2回 2013年9月13日 13:00~17:00 日本科学未来館
 - i) 科学館等への展開について (八木絵香)
 - ii) 次の世界市民会議への対応を含む、本課題の今後の展開について (池辺靖、白根純人)